

o d a i

magazine

vol.2



■えいがのこと 『フランシス・ハ』

ユーロスペースが移転してから初めて足を踏み入れた。映画館に行くこと自体、実に何年ぶりだろう。同年代の監督、グレタ・ガウウィグの前情報も何もなかった「」に流れてきたという理由だけで。映画美学校と同じ建物に入っていることも初めて知った。まったく世の中についていけない。本題に戻ると、ダンスを愛するフランシスのニューヨークでの生活を描いたこの映画。

モチなくていい、undateableでいい。そう思わせてくれる。言いたいことは時に残酷なまでに短い。

■荒川喫茶警 coffee snack 白鳥

中島弁財天のある三ノ輪銀座。このあたりを散策するのは、もったもったな仕事のサボり方の一つだと最近発見いたしました。漬物屋と花屋も兼ねる八百屋ですとか、カウンタートしかない極狭なもつの店ですとか：そういう個人的なお店を発見するのは私には無上の喜びな訳です。

その三ノ輪銀座商店街の中には喫茶店がいくつありまして、今回はその一つ、白鳥さんにお邪魔しました。下町に行くとしばしば見かける、昼は喫茶店、夜はスナックという形態のお店のようです。店の奥行きが20メートルくらいでしょうか。カラオケ設備もあるし、ソファの配置もたしかにそれっぽいですね。

お昼ご飯がまだだったので、ドライカレーを注文。ごはんの味付けもしっかりしていて、商店



街を歩き回って疲れた身体も癒やされたのでした。おや？ 視界を何か白いモノが駆け抜けていったぞ、と見ると、フワフワとしたペルシャ猫。しばらく外を眺めていましたが、やがて商店街へと消えていきました。猫にとっても良い町だろうな、三ノ輪は。

■オーダー ホットコーヒー三五〇円 ドライカレー五〇〇円

NIGHTMARE PICTURES



画師は役者絵を得意とする勝川派の大立者であります。いつもは最高に粋な人々を描く春章らしからぬ不可思議な絵ですが、じっと見つめていると心の奥からどす黒い濁が湧き上がって来るような気がします。

勝川春章 「嵐音八」

この店の名の由来である小台橋。この橋がなかったころ、現在の隅田川には、小台の渡しあるいは尾久の渡しと呼ばれる渡し場があった。徳田秋声の『あらくれ』に、この尾久の渡しの様子を描写した一節がある。「のんどりとした暗碧なその水の面にはまだ真珠色の空の光がほのかに差していて、静かに漕いでゆく淋しい舟の影が一つ二つみえた。岸には波がだぶだぶと浸って、怪獣のような暗い木の影が、そこに揺めいていた。」この有名な自然主義小説の前半部は小台近辺を舞台にしているのだが、「東京へ行く」「東京の人」といった表現があり、小説が書かれた大正四年当時、この地は東京の外とされていたようだ。荒川放水路が昭和五年に開削されるまで、現在の隅田川（旧荒川）こそが東京の北を区切る境界であった。引用したような不気味に静かな風景は無くなったが、美しい緑色の小台橋を渡って帰宅するとき、唐突に視界を覆う空のせいだろうか、ふと異界へ入っていくような感覚をもつことがある。

自宅が異界というのおかしな話ではあるが、月に一度この店で行なわれているイベント「橋と音楽」の出演者が、はじめてこの橋を渡るときには、より濃密に越境の気分を味わうのではないか。第三回に出演した柴田聡子氏は、MCなしでひたすら日常に点在するちいさな異物を唄いつづけたあげく「荒川を見てきたんですけど、草野球してて最高でした」とだけ話した。山田庵巳氏はダンテの『神曲』、ゲーテの『ファウスト』に匹敵すべき大叙事詩『機械仕掛乃宇宙』の冒頭を「太陽の昇らない街、小台。」と語りはじめた。第四回の出演者、杉浦真寛氏はこの店で出会った不思議な婦人との交流をまるで怪談のように語った。斉藤友秋氏は演奏する曲がなくなってしまう、客席からのリクエストに咄嗟に応じた曲が稀代の名演だった。10月19日に行なわれる第五回「橋と音楽」。このちいさな異界で、次はどんな奇蹟が起きるだろうか。

■中村安伸（なかむら・やすのぶ）

今年の春、小台に引越してきた俳人。どなたでもご参加いただける句会を企画中です。

■おだいのわたし

(1) 橋と音楽

中村安伸



橋と音楽 齊藤友秋 杉浦真寛

すごい人がいるなって思って
もったいない、拍手だなんて

-杉浦真寛-

-齊藤友秋-